

京都市学校歴史博物館研究紀要

第2号

目次

- 論文 京都番組小学校における唱歌教育の導入 和崎光太郎 (1)
- 研究ノート 平成 24 (2012) 年度における団体見学の現状と課題 小中秀則 車田秀樹 (13)
- 作品紹介 久保田米僕が描いた二つの遊戯図 一唐子と園児一 森光彦 (19)

平成 25(2013)年 6月

京都市学校歴史博物館

京都番組小学校における唱歌教育の導入

和崎光太郎

はじめに

京都番組小学校とは、学制頒布以前の明治二（一八六九）年に全国に先駆けて開校した、上京・下京における六四の学区制小学校の通称である。各学校は学制頒布後の明治八（一八七五）年前後、公式名称の他に一種の雅号を用い始め、その雅号は明治一九（一八八六）年に小学校令が出された後にほとんどの学校で正式名称とされ、近年の統廃合で学校が閉校された後も「学区」の名称などに残る^一。この番組小学校の創立過程や地域における役割については、研究の蓄積がある^二。ただし、そこでどのような教育が展開されたのかについては、不明な点が多い。以上のことをふまえ本稿では、番組小学校における唱歌教育がいつ、どのような経緯をたどり導入されたのか、明らかにしたい。

なぜ唱歌教育なのか。周知のように、唱歌とは「歌う」ことを教える教科なのだが、この「歌」とは明治以前の「歌」とは根本的に異なっていた。すなわち、明治の小学校で取り組まれた唱歌教育とは、外来のメロディーに乗せられた「歌」を集団で唱和するというこれまで日本人が経験してこなかった身体動

作を国家規模で国民に叩き込む壮大なプロジェクトであり、これは単なる知識の伝播ではなく、日本人の身体改造、教育を通した近代的身体の獲得という大掛かりなプロジェクトであった。

唱歌教育を意識レベルでの国民形成として把握するにとどまらず、身体レベルでの近代化・国民化として考察した研究は、「むすんでひらいて」を「国民身体改造」という視点から再考した安田寛^三、国民形成的視点から唱歌遊戯を検討した渡辺裕^四、唱歌帖の分析から日本語音声の標準化過程を追った平尾佳子^五などによってすでに試みられている。しかし、この唱歌教育計画が壮大であればこそ、そうたやすく全国に浸透させることはできない。唱歌教育の普及が国家プロジェクト推進の結果と言えるのかどうか、あらためて問わねばならぬだろう。唱歌教育が単なる知識の伝播以上の意味を持つていてからこそ、唱歌教育の地域への浸透プロセスを解明することで、当時の各地域における教育のあり方に加え、教育情報がどのようなルートで流れ、どのような事情で教育環境が整えられていったのかが明らかになるのである^六。

^一 安田寛『「唱歌」という奇跡 十二の物語—贊美歌と近代化の間で』文春新書、二〇〇三年)一一一六頁。

^二 渡辺裕『歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ』(中公新書、二〇一〇年)八〇一一一四頁。

^三 平尾佳子『唱歌教育と日本語音声の標準化—明治の唱歌帖からみた教室の声—』大阪府立大学大学院人間社会学研究科『人間社会学研究集録』(八号、二〇一三年)一三三一五三頁。

^四 山住正己は『唱歌教育成立過程の研究』において、その残した課題の一つとして「唱歌教育の地方への普及過程を十分にあきらかにすることができなか

^一 辻ミチ子『町組と小学校』(角川書店、一九七七年)六六一一七一页、石島庸男『京都番組小学校創出の郷学的意義』『講座 日本書』第一卷』(第一法規、一九八四年)一五〇一一七六頁、三上和夫『学区制度と住民の権利』(大月書店、一九八八年)八三一五五頁など。

当然ながら、その教育情報伝達ルートや教育環境は、全国まとめて一般化で
きるものではない。明治という時代だからこそ、地域によって異なる実情があ
つた。一方で、ある地域のルートや環境が閉鎖的・独自に発展してきたわけでは
ない。番組小学校の場合では、京都府や中央政府、さらに同志社などの影響
が少なからずあつた。ゆえに、これらの外的環境を考察対象に含め、そもそも
京都に唱歌が入つてくるのはどのようなルートがあり、そのルートは具体的
にどのような展開を見せたのか、小学校での唱歌教育のための必須教具オルガ
ンはいつ・どのように番組小学校に導入されたのか、番組小学校での唱歌教育
の教え手はいつ・どのように育成されたのか等を明らかにしていきたい。さら
に、唱歌教育にはどのような困難があり、実際どのようなことが教えられて
いたのかも限られた資料から考察を試みたい。

一 唱歌の誕生 —明治九(一八七六)年～同二(一八七九)年—

近代日本最初の学校法令である学制が颁布されたのは、明治五(一八七二)
年のことであり、そこで早くも「唱歌」(以下、教科名の場合は「唱歌」と表
記)が登場する。しかし、下等小学教科の最後に記された「唱歌」は「当分之
ヲ欠ク」⁷とされ、具体的な教科内容も不明であった。また、ここでの「唱
歌」が前近代の「しようが」⁸なのか、西洋式の「しようか」⁹なのかは定かで
はない。

⁷ 文部省内教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史 第一巻』(教育資料調査会、一九三八年)二八四頁。
⁸ ここでの「しようが」の定義は、平尾佳子にならって「楽器で奏する旋律やリズムを音韻のつながりで唱える學習法」(平尾佳子前掲「唱歌教育と日本語音声の標準化—明治の唱歌帖からみた教室の声—」一三四頁)とする。

⁹ 以上、明治九(一八七六)年以降の田中、目賀田、伊沢の働きについては、安田寛「京都と神戸ステーションの音樂教育史—アメリカン・ボード日本ミッショーン音樂教育史 その二—」『キリスト教社会問題研究』(四七号、一九九八年)四二一四八頁を参照。

一方京都では、学制頒布の三年前に六四の番組小学校が開校していたが、そ
れぞれ伊沢が田中に「掛図雑形」を提出している¹⁰。以上のような経緯があり、明治一二(一八七九)年、文部省内に音樂取調掛(後の東京音樂学校)が創設された。すなわち、中央政府における唱歌教育導入は明治九(一八七六)年に始まり、その三年後の明治一二(一八七九)年には早くも音樂取調掛が創設されたのである。

一方京都では、学制頒布の三年前に六四の番組小学校が開校していたが、そ
れぞれ伊沢が田中に「掛図雑形」を提出している¹⁰。以上のような経緯があり、明治一二(一八七九)年、文部省内に音樂取調掛(後の東京音樂学校)が創設された。すなわち、中央政府における唱歌教育導入は明治九(一八七六)年に始まり、その三年後の明治一二(一八七九)年には早くも音樂取調掛が創設されたのである。

一方京都では、学制頒布の三年前に六四の番組小学校が開校していたが、そ
れぞれ伊沢が田中に「掛図雑形」を提出している¹⁰。以上のような経緯があり、明治一二(一八七九)年、文部省内に音樂取調掛(後の東京音樂学校)が創設された。すなわち、中央政府における唱歌教育導入は明治九(一八七六)年に始まり、その三年後の明治一二(一八七九)年には早くも音樂取調掛が創設されたのである。

の課業表に「唱歌」は入っていない。その後の明治一〇年代（一八七七—八六年）においても、唱歌教育が行われたことを示す資料は後述の本能小学校の事例を除いて確認できていない。しかし京都では、番組小学校以外の場において、イラデルフィア万国博覧会に出席した明治九（一八七六）年、すでに京都ホーム（翌年、同志社女学校と命名）でドーン宣教師によるメーリソンの掛図を用いた音楽教育が始まっており、翌明治一〇（一八七七）年三月には京都ホームにオルガンが到着している^一。ここでの音楽教育の詳細は明らかではないが、メーリソンの掛図等を用いていることから日本語ではなく英語で音楽教育がなされていることは確実であり、歌われた曲も賛美歌を中心であったと思われる^二。当時はまだ同志社という閉じた世界での教育と理解すべきだが、以上のことから同志社女学校は京都への最初の唱歌教育導入ルートと位置づけられるだろう。

京都ホームにオルガンが到着した明治一〇（一八七七）年三月、同年同月に

作成された京都女学校^三給費生規則第十二条において、「体操遊歩の時間」のうち週三時間が「絃歌」にあてられ、「正雅ノ曲ヲエラビ教ヘテ气血ヲ和シ淑徳ヲ養フ」と指導内容・目的が記されている^四。「体操遊歩の時間」に琴

などの弦楽器を弾きながら歌う「絃歌」が含まれていることは、「唱歌」誕生以前から音楽教育が身体形成として考えられてきたことを意味する。同年一二月に出された京都女学校英学普通科カリキュラムには、早くも「唱歌」が確認できる^五。カリキュラムに掲載されていることを根拠に実際に唱歌教育がなされていたと考えるのは早計だが、翌明治一一（一八七八）年一〇月には日本最初の唱歌教科書である京都府女学校編『唱歌』が出版され、翌明治一二年九月には京都府学務課の役人が同志社女学校の音楽教育を視察していることがらも^六、この頃には京都女学校において何らかの形で唱歌教育が行われたこと、そして少なくとも京都府学務課が唱歌教育導入に積極的であったことがわかる。

以上のように、明治一〇（一八七七）年前後は中央政府と京都においてそれぞれの唱歌教育導入の動きが確認できる。しかし、中央ではまだようやく音楽取調掛が創設されたところであり、京都では同志社女学校・京都女学校という限られた学校での取組みだった。

二 唱歌教育の黎明 — 明治一三（一八八〇）年～同一九（一八八六）年

唱歌という全く新しいジャンルを教えるためには、それを教える教師と教材

が揃わなければならない。明治一二（一八七九）年時点での状況をおおまかにまとめれば、中央では教師育成と教材作成の準備がようやく整つたところであり、京都では女学校という場において教師・教材がある程度揃っていたが小学校にまでは展開されていなかつたということになる。すなわち、明治一〇年代初頭（一八七〇年代末）において、小学校での唱歌教育は、限られた一部の地域において何らかの形で行われていたかもしれないが、そのような例外的な

二 安田寛前掲「京都と神戸ステーションの音楽教育史—アメリカン・ボード日本ミッショニン音楽教育史 その二」三〇—五七頁。
 三 坂本清音「草創期（一八七六—一九〇〇年）同志社女学校の音楽教育」『同志社論叢』（一八号、一九九八年）六七—七六頁を参照。
 四 京都女学校は、明治五（一八七二）年に新英学校及女紅場として創設され、明治九（一八七六年）年に京都女学校及女紅場と改称された際に女学校は学務課、女紅場は勧業課の管轄と明確に分けられた。後の明治一五（一八八二）年に女紅場が廃止され、京都女学校は京都府女学校と改称される。以上、小山静子「高等女学校教育」本山幸彦編『京都府会と教育政策』（日本図書センター、一九九〇年）三〇三十三〇八頁を参照。
 五 「京都女学校給費生規則の布達」『京都府百年の資料 五 教育編』（一九七二年）一九四一—一九七頁。

一六 「文部省御達留」より「同志社視察之記 第二回」（明治十一年九月）（徳重文書）。

ケースを除いてはまだ日の目を見てはいなかつたのである。このことは、明治一四（一八八二）年五月に出された文部省達第十二号「小学校教則綱領」第二条において、いまだ「唱歌」は「但唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ」^(一)という扱いで課業表から省かれていたことからもわかる。このような状況だからこそ、小学校用唱歌教科書の発行が急がれたのだろう。音楽取調掛が設置された年の翌明治一三（一八八〇）年、メーリンが来日し、唱歌教科書の作成が本格化する。その元になつたのは、目賀田の尽力によつて作成され伊沢がアメリカから持ち帰つてきた「掛図雛形」（前述）であり、明治一五（一八八二）年に音楽取調掛編『小学唱歌集 初編』が出版される^(二)。明治一六（一八八三）年に同第二編、明治一七（一八八四）年に同第三編が出版され、明治一九（一八八六）年の小学校令で近代小学校制度の基礎が固められた後、明治二四（一八九一）年の文部省令第十一号「小学校教則大綱」第十条に至り、ようやく「唱歌ハ耳及发声器ヲ練習シテ容易キ歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ兼ネテ音楽ノ美ヲ弁知セシメ徳性ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス」^(三)と指導内容・目的が明記された。ただし、この法令は「尋常小学校ノ教科ニ唱歌ヲ加フルトキハ通常譜表ヲ用ヒスシテ容易キ单音唱歌ヲ授クヘシ」^(四)と続いている。「唱歌ヲ加フルトキハ」という但し書きがあることから全小学校でただちに唱歌を教えることは現実的に不可能だと認識されていたこと、生徒には楽譜を読ませず、和音を用いずに単音での唱歌に徹底することが定められたことがわかる。

このように、明治一三（一八八〇）年から同二四（一八九一）年にかけて文

部省の唱歌教育導入政策が進展したのだが、その過程で唱歌教育導入における京都と中央との結びつきが生まれる。その嚆矢は、明治一五（一八八二）年、京都府女学校の教員三吉艾（おさむ）と伊藤よねが音楽取調掛で伝習を受け始めたことにある^(五)。この伝習は翌年七月に終了、成果はすぐに現れ、同年九月に京都府女学校で特別唱歌専門伝習が開始された^(六)。また、詳しい期間は不明だが、同時期に三吉は本能小学校（下京、現中京区）においていち早く唱歌教育を実践したとされる^(七)。

京都府女学校での伝習がどれほど小学校教員による唱歌教育を可能にしたかは定かではないが、伝習が開始された三年後、大きな追い風が吹く。明治一九（一八八六）年の小学校令公布にともなつて小学校教員の単科免許状が補正され、裁縫科の女教員が職を失うという問題が発生したのである。三吉はその受皿として唱歌科教員の育成を提案し、自ら主催者となつて明倫小学校（下京、現中京区）において同年七月八日から九月一八日まで婦人唱歌研究会を開催した。指導者は三吉の他、京都府女学校師範科で伊藤よねに学んだ赤松藤枝を補助講師とし、オルガンは京都盲啞院のオルガンを借りて使用、入会者は一〇五名だった^(八)。閉会後には、「小学唱歌ノ普及ヲ図」ることを目的とした京

二七 文部省『学制百年史 資料編』（帝国地方行政学会、一九七二年）八一頁。

二八 『小学唱歌集 初編』の成立過程については、安田寛前掲「唱歌の起源」目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元^(九)一一四頁、山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』七九一一八頁を参照。

二九 教育史編纂会編修『明治以降教育制度発達史 第三卷』（竜吟社、一九三八年）一〇〇頁。

二〇 教育史編纂会編修前掲『明治以降教育制度発達史 第三卷』一〇〇頁。

三 ただし伝習の開始は明治一六（一八八三）年初頭の可能性もある。両者の伝習については、山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』一五二一一五三頁、一五七一一五八、丸山彩「明治一〇年代～二〇年代の京都府女学校・京都府高等女学校における音樂教育の展開」日本音樂教育学会『音樂教育学』（四一卷二号、二〇一一年）一五一六頁を参照。

三一 丸山彩前掲「明治一〇年代～二〇年代の京都府女学校・京都府高等女学校における音樂教育の展開」一六頁。

三二 吉田恒三編『京都音樂史』（京都音樂協会、一九四二年）三頁。なお、市制が明治二二（一八八九）年に施行されるまでは番組小学校は府学務課の管轄だつた。京都府の教育政策及び市制施行後の府と市の教育政策については、小股憲明「明治期京都府の教育政策」本山幸彦編前掲『京都府会と教育政策』一

三三 以上、婦人唱歌研究会については『京都教育会雑誌』（九号、一八八六年

都婦人唱歌会が結成され^(一)、六拾円を拠（なげう）—引用者注）ち楽器一台を購入^(二)している。

婦人唱歌研究会開催の意義は、唱歌教員の育成だけではなく、「唱歌流行ノ氣運」^(三)を起こしたことにある。例えば、同研究会に刺激されて明治一九年（一八八六年）末には上京区小学校校長会内にも唱歌研究会が結成され^(四)、翌明治二〇（一八八七年）一月からは龍池小学校（上京、現中京区）に同志社からグリーン夫人が招かれ小学校教員向けの音楽の伝習が行われている^(五)。同月には京都婦人唱歌会メンバーが弥栄小学校（下京、現東山区）で開催された京都教員協会第一回総会において会員入場後に「唱歌奏楽」を実演し^(六)、さらには同月の京都博覽会への天皇行幸に際してはオルガン伴奏にあわせて合唱している^(七)。オルガンの伴奏で合唱を披露するというのは當時としてはまだ珍しいことであり^(八)、これらの事例は當時京都が唱歌教育先進地のひとつになっていたことを物語っている。また、高等小学校ではすでに唱歌教育が行われていたようであり、明治二〇（一八八七年）一一月に文部大臣森有礼が下京区

八月）七一—七二頁、『京都教育会雑誌』（一号、一八八六年一〇月）七二—七二頁、『京都府教育雑誌』（八七号、一八九九年七月）二二—二三頁を参照。
盲亞院のオルガン（京都府立盲学校に現存）については、赤井勵『復刊選書一
オルガンの文化史』（青弓社、一〇〇六年）三八—三九頁を参照されたい。

^(五)『京都教育会雑誌』（二三号、一八八六年一二月）六二—六三頁。なお、

以後の会場は明倫校とは限らなくなる。

^(六)『京都府教育雑誌』（八七号、一八九九年七月）一三三頁。「台」という単位と値段から、おそらくオルガンだろう。後にさらに一台購入している。

^(七)『京都教育会雑誌』（一号、一八八六年一〇月）七二頁。

^(八)『京都教育会雑誌』（一号、一八八六年一〇月）七二頁、『京都教育会雑誌』（一四号、一八八七年一月）七二頁。

^(九)『京都教育会雑誌』（一五号、一八八七年一月）五七頁。

^(十)『京都教育会雑誌』（一六号、一八八七年三月）四七頁。

^(十一)丸山彩「京都における唱歌会の活動—明治二〇年前後の女子教員と『唱歌』—」音楽教育史学会編『音楽教育史研究』（一二号、二〇〇九年）九九頁。
^(十二)山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』二八頁。

高等小学校を巡視した際、最初の授業が二年生・三年生女子の「唱歌」となっている^(十三)。では、尋常小学校（現在の小学一年から四年にあたる）において唱歌教育はいつ・どのように始動したのだろうか。

三 唱歌教育の始動 —明治二〇（一八八七年）～同二八（一八九五年）年—

（一）唱歌教育のための環境整備

尋常小学校における唱歌教育導入を考えるにあたって、明治一九（一八八六年）年の婦人唱歌研究会開催はとても重要な転機になっている。前述したように同研究会終了後には各種イベントで唱歌が披露されるようになり、これは唱歌という近代の産物が市井に認知されていったことを意味する。この「唱歌流行ノ氣運」は、当然ながら尋常小学校における唱歌導入を後押しした。

具体的には、明倫校の近隣学校において唱歌教育のための環境整備が整えられていく。明治二〇（一八八七年）一〇月には教員と学区民が構成する生祥教育会が生祥尋常小学校（下京、現中京区）にオルガンを購入し^(十四)、日彰尋常小学校（下京、現中京区）ではドイツ製オルガンを大阪から購入している（資料①）。三五。翌月には開智尋常小学校（下京、現下京区）へ学区民が六〇円の

^(十三)『京都教育会雑誌』（一四号、一八八七年一一月）四一—四二頁。

^(十四)『京都教育会雑誌』（二三号、一八八七年一〇月）五一頁。

^(十五)関口秀範「聞見録」京都市役所編『京都小学五十年誌』（京都市役所、一九一八年）三五五頁、日彰百年誌編集委員会編『日彰百年史』（一九七一年）

扉絵解説。関口は『京都小学五十年誌』編纂時の日彰尋常小学校校長。後年、この購入が「市内小学校で風琴を買入れた一番か二番であったと記憶する」と語られている（関口秀範前掲「聞見録」三五五頁）。なお、京都府教育会『京都府教育史 上』（京都府教育会、一九四〇年）五九〇頁ではこのオルガンの購入が明倫尋常小学校となつていてもかかわらずこの箇所だけ「日彰」が「明倫」となつていて、さらに明倫校関連の史料から当時オルガンを購入した記録が見出せないこ

和製オルガンを寄贈しており^{三六}、婦人唱歌研究会が開催された一年後の明治二〇（一八八七）年一〇月から、下京の限られた小学校ではあるがオルガンが備えられ始めたことがわかる。一方教科書は、修徳尋常小学校（下京、現下京区）で用いられていた明治二一（一八八八）年七月八日発行の大和田建樹・奥好義編『明治唱歌 第一集 三版』（東京）が、番組小学校で使われた現存最古の唱歌教科書として遺っている^{三七}。

さらに、カリキュラムの面でも大きな前進が見られる。明治一九（一八八六）年の文部省令第八号「小学校ノ学科及其程度」^{三八}に基づいた明治二〇（一八八七）年の府令第三十一号「小学校学科及其程度実施方法」第六条において、「尋常小学校ニ於テ土地ノ情況ニ因リ图画唱歌ノ一科若クハ二科ヲ加フルトキハ左ノ程度ニ従ヒ他ノ学科ノ時間ヲ減シ之ニ充ツヘシ此場合ニ於テハ加設ノ学科ヲ具シ当庁へ開申スヘシ（中略）唱歌 単音唱歌」^{三九}とされており、「土地ノ情況ニ因リ」という留保は前年の文部省令そのままなのだが、文部省令では「単音唱歌複音唱歌」とされているところが、京都府令では単音唱歌に限ることが明記された。後に明治二四（一八九一）年の文部省令第十一号「小学校教則大綱」において教育内容が単音唱歌に限られる（前述）ことを考えれば、京都府の方が唱歌教育の現状をより正確に把握していたと言える。また、あわせて京都府から出された「尋常小学校授業時間配当準拠表」には、「唱歌ヲ加フル学校ニ於テハ其時間ハ体操科ノ内ヨリ月水金曜日ハ二十分火木曜日ハ

とから、『京都府教育史 上』の「明倫」は「日彰」の誤植だと考えられる。
三六 『京都教育会雑誌』（一四号、一八八七年一一月）三九頁。
三七 京都市学校歴史博物館管理。なお、明治一八（一八八五）年版の文部省編『小学唱歌集 初編 第三版』（一八八五年、初版は一八八一年）が京都市学校歴史博物館に現存するが、どの学校で用いられていたのかは不明。

曲目は、全一九曲中、大和田の作歌が一〇曲あり、作曲は奥作曲が六曲、作頃より漸く諸種の唱歌集は刊行され、殊に明治二十一年五月大和田建樹・奥好義によつて出版された明治唱歌四冊の如き實に古今の名曲を集めたものであつた^{四〇}と評価されていることから、京都においても広く用いられていたと考えられる。

四〇 京都市小学校創立三十年紀念会編前掲『京都小学三十年史』三七三頁。
四一 京都市小学校創立三十年紀念会編前掲『京都小学三十年史』三七四頁。
四二 山住正己前掲『唱歌教育成立過程の研究』二五三一—二五五頁。
四三 吉田恒三編前掲『京都音楽史』五頁。

四十分ヲ取テ之ニ充ツルモノトス」^{四〇}とあり、京都府においては唱歌教育があいかわらず体操教育、すなわち身体形成の範疇にあつたことがよくわかる。使用教科書は、英語科・唱歌科・習字科の教科書を定めた明治二〇（一八八七）年の甲第三十号^{四一}において、『小学唱歌集』の初編・二編・三編とされている。このように、婦人唱歌研究会の開催とその後の「唱歌流行ノ氣運」は、番組小学校への唱歌教育導入を強く後押ししたのである。

では、番組小学校において始動した唱歌教育の内容は、どのようなものだったのだろうか。当時はまだ「唱歌帖」など児童の学習の痕跡を示す教材が用いられておらず、教育内容を示す同時代に書かれた資料は『京都教育会雑誌』のわずかな論考を除いて確認できていない。また、音楽取調掛編『小学唱歌集』はその内容が当時の小学校現場になじまず不評であり^{四二}、それが広く普及していたからといつて実際教育現場でどの程度使用されたのかはわからない。『小学唱歌集』に寄せられた批判に応えて伊沢修二編『小学唱歌』が出版されたのは、明治二五（一八九二）年である^{四三}。ゆえにここでは、前掲の大和田建樹・奥好義編『明治唱歌 第一集 三版』に見られる特徴と当時の時代的状況から考察してみよう。

その奥付によると、出版から二ヶ月で三版が出ており、版数からは広く普及していたことがうかがえる。また、『京都音楽史』において、「明治二十年の

曲者無記名で「西洋大家の歌曲集より選べる」曲が一三曲あり、この選定者は編者の奥だらう。つまり、全体の三分の一が大和田と奥の手になる曲ということになる。選曲は、「春の歌」「鳥の歌」という花鳥風月を歌つたものから、「勤学の歌」「皇国の守」という教育的意図が露骨に表れた曲まで幅広く、「君が代」は収録されていない。特徴的なのは、天皇を崇める「天長節」とキリストを崇める「クリスマスの歌」が同じページに併記されていることだろう（資料②）。時はまだ「祝日大祭日唱歌」が選定される明治二六（一八九三）年の五年前、明治二一（一八八八）年であり、だからこそ、比較的自由度の高い選曲と配置が可能だつたのだろう。この唱歌教科書には「天長節」の他に「紀元節」も収録されているのだが、どちらも「祝日大祭日唱歌」における「天長節」「紀元節」とはまったく別の曲である^{四五}。

（二）唱歌教育の困難と実態

しかし、この教科書には大きな問題点があつた。すべての曲が五線譜で書かれており、数字譜が一切用いられていないのである。当時はまだ五線譜を読むことができる教師はごく少数であり、数字譜も普及していなかつたので、どちらにせよ研究会などで特別な教育を受けていなければ教員は楽譜から曲を読み取ることはできなかつた。教科書があつてもそれを使うことができないという場面が多々あつたであらうことは想像がつく。

樂譜を読めたとしても、それを演奏する楽器がなかつた。明治二〇年代初頭（一八八〇年代末）はまだオルガンが国内で量産化されておらず、購入できたとしても非常に高価なものに限られたからである。確かに、前述のように明治二〇（一八八七）年末には少なくとも生祥校・日彰校・開智校がオルガンを備

^{四五} この教科書における「天長節」は大和田建樹作歌、上真行作曲。「紀元節」は下田うた子作歌、奥好義作曲。

えており、翌明治二二（一八八八）年に大阪の四代目三木佐助が本格的にオルガンの販売を開始しているので、この頃には番組小学校にオルガンが導入され始めていたかも知れない^{四六}。しかし、京都では明治三〇（一八九七）年頃にようやく村上勘兵衛^{四七}がヤマハ製オルガンを販売していたとされ^{四八}、京都の樂器販売会社の老舗、十字屋田中商店（現 JEUGIA）が東京十字屋から独立したのは明治三一（一八九八）年である^{四九}。明治二〇年代（一八八七—一八九六年）に京都でオルガンを購入できたとしたら、村上勘兵衛か東京十字屋^{五〇}がすでに販売していたという可能性以外は考えられない。しかも、購入した場合はかなりの高価である。ゆえに、明治二〇年代に番組小学校でオルガンを購入できたのは前述の三校の他は少数にとどまつたと考えるのが妥当だろう。当時の様子を知る関口秀範は後年、「風琴の購入が容易ではないので児童の教授は多く笏拍子が用ひられた」^{五一}と記している。ただし、番組小学校では大

^{四六} 全国的にも明治二〇（一八八七）年末から翌年にかけて、限られた小学校にではあるがオルガンが導入されたとされる。ただし国産オルガンが全国に普及するのは、明治三〇年代（一八九七—一九〇六年）を待たねばならない（赤井勲前掲『復刊選書一 オルガンの文化史』三九一五〇頁、三五〇—五二頁）。

^{四七} 明治二一（一八六九）年の番組小学校創設當時から京都（東洞院三条上ル）で教科書・教具などを多数販売していた御用書店。

^{四八} 吉田恒三編前掲『京都音楽史』五頁。

^{四九} 明治四三（一九一〇）年に日彰学区出身の一宮道子（後の日本女子大学教授・作曲家）から日彰幼稚園に寄贈されたヤマハ製燭台付風琴（京都市学校歴史博物館管理）は、十字屋で購入されている（現物確認）。一宮については、長尾智絵「一宮道子の生い立ちと京都時代の音楽教育」日本女子大学編『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』（一九号、二〇一三年）一七一一四頁を参照されたい。

^{五一} JEUGIA の公式創立年は明治三一（一八九八）年だが、明治二九（一八九六年）には京都で営業していたようである（吉田恒三編前掲『京都音楽史』一五頁）。

正後期にスタイルンウェイなど高価な外国製ピアノが各地で寄贈されており、オルガンも前述の開智校のように学区民からの寄贈によって全国に先駆けて明治二〇年代に備わっていた学校が少なからずあつた可能性もある。

唱歌のメロディーを児童に聴かせる手段は、オルガンとピアノだけではない。当時はまだレコードのような蓄音機は存在しなかつたが、蓄音機の原型とも言うべき器具があつた。紙腔琴（しこうきん）という、穿穴ロール紙を巻いてリードを響かせる演奏器具である。明治二〇（一八八七）年頃から徐々に広がり、国産オルガンが急速に普及した明治三〇年代（一八九七—一九〇六年）の末には衰退したとされるが、この紙腔琴が短期間ながら小学校や家庭において広く用いられたであろうことは、すでに金子が明らかにしている（資料③）^{五二}。

问题是、紙腔琴が番組小学校においてどれほど用いられたのか、である。学校関連資料においては、紙腔琴を使用したことに関する記述を発見できていない。ただし、明治二六（一八九三）年八月にはすでに販売元の東京十字屋が「偽せ物御要心」の広告を出し^{五三}、曲譜目録に三四曲の唱歌が収められ^{五四}、村上勘兵衛（前述）が京都で紙腔琴を販売していることからも^{五五}、明治二〇年代後半（一八九二—一九六年）には紙腔琴及びその類似品は全国の少なくとも都市部の学校では使われており、番組小学校においても使われ始めていたと考えられる。

（駿々堂出版部、一九四〇年）一二頁にも同様の記述があるが、文面からこの記述は関口秀範前掲「聞見録」三五五頁を参考して書かれたと考えられる。前述のように、開智校には当時すでにオルガンが備えられていた。

五一 金子敦子「紙腔琴の歴史」お茶の水女子大学編『お茶の水音楽論集』（特別号、二〇〇六年）二五三—一六六頁。
 五二 倉田繁太郎編『紙腔琴の栄』（十字屋音楽部、一八九三年）六〇頁。
 五三 倉田繁太郎編『紙腔琴の栄』（十字屋音楽部、一八九三年）六〇頁。
 五四 倉田繁太郎編前掲『紙腔琴の栄』七〇—七一頁。
 五五 他に北は北海道から南は鹿児島まで、京都を含めて全国計一七ヶ所で販売されている（倉田繁太郎編前掲『紙腔琴の栄』卷末の広告）。また、通信販売で購入する場合は曲譜を三円以上注文すると送料が無料となつていて（倉田繁太郎編前掲『紙腔琴の栄』卷末の謹言）。

唱歌教育導入における困難は、ヒト・モノ以外にもあつた。そもそも日本人には、メロディーに乗せて歌詞を歌うという習慣がなかつた上に、当時の唱歌はキリスト教との結びつきが強くイメージされていた。例えば、先に述べた明治一九（一八八六）年の婦人唱歌研究会に対しても、「世人或は艾（三吉艾一引用者注）に一の野心ありて婦人を集めて娛樂を為すと言ひ或は營利を目的として斯る事業を起せりと誹り或はキリスト教を伝播するものと疑ふ等種々の攻撃を受け」^{五六}たと記録されている。教会で歌われていた贊美歌と同研究会で歌われた唱歌は、今日ではイメージしづらい程に似ても似つかないものであつただろうが^{五七}、多人数が集まり大声を出して歌うという風習がなかつた日本において両者が同一視されるのは、無理もないだろう。

では、唱歌教育が行われた教室内はどうのような状況だったのだろうか。明治二四（一八九一）年の京都教育会（本部は京都府師範学校内）会員による報告では、市内では「現今ニテハ本科ヲ設置セザルノ学校ナク」とされており、これは当時すでにほとんどの番組小学校で唱歌教育が行われていたことを示唆する。ただしその教育内容は惨憺たるものだと報告されている。すなわち、「父兄」は「学校ノ唱歌夫レ何ノ効力アル只愛兒ノ咽喉ヲ傷フノ害アルノミ宜シク之ヲ全廢シテ以テ有用ナル讀書算術智字等ヲ精鍊スベシ」と言い、教室では児童が「或ハ立チ或ハ坐シ或ハ高談シ或ハ相争鬭シ或ハ啼（な）」^{五八}（引用者注）クモアリ或ハ笑フアリ或ハ怒ルアリ」という状態、しかも教師の歌唱力は「蛙鳴蝉噪」というありさまだという。この会員は、だからこそ唱歌会のより一層活発な活動が必要だと述べるのだが^{五九}、この報告は唱歌教育そのものへの理解不

五六 『京都府教育雑誌』（八七号、一八九九年七月）一二二頁。
 五七 明治後期における日本人の「歌声」獲得過程については、嶋田由美・小川容子・安田寛「洋楽導入による異文化適応としての日本人の歌声の変化」和歌山大学編『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』（五六号、一九〇六年）一七一—三頁を参照。
 五八 以上、ST生「唱歌科教授二付テ」『京都教育会雑誌』（六一号、一八九一年）二九一—三一頁。

足と教師不足という、当時の唱歌教育をとりまく困難を如実に物語つてゐる。

以上、当時はまだ唱歌を学ぶことの意味がなかなか理解されず、唱歌教育が市民権を得たとは言えない状況だった。これは、児童と親にとどまらず、教師にとつても同様である。ゆえに、唱歌教育が学校に定着するためには、唱歌そのものの意味ではなく、他に必要性が生じねばならなかつた。

四 唱歌教育の定着－明治一九（一八九六）年～同三四（一九〇一）年－

それを象徴的に表してゐるのが、オルガンを売るための広告文である。明治二九（一八九六）年に出版された『新編 教育唱歌集』を見ると、その巻末にある三木楽器のオルガン広告の見出しが「祝祭日儀式用樂器」「教育唱歌軍歌用樂器」となつてゐる（資料④）。つまりオルガンは、祝祭日儀式を祝うための樂器、教育唱歌（地理や読本を歌にしたもの）と軍歌を歌うための樂器であり、学校用オルガンと一心同体の唱歌もそれ自体が目的ではなく、あくまで儀式の効果を最大限引き出す（つまり国民・臣民意識の培養）ため、または地理などの學習内容を定着させるための手段であつた。当時は日清戦争の経験を通して日本人に「国民」意識が急速に定着しつつあり、当時の京都の様子は後に「二十七八年の戦役に軍歌及び軍歌集続出し為めに洛陽の紙価を高らしめるものがあつた」^{五九}とまで表現されている。日清戦争がもたらした軍歌の氾濫と「国民」意識の高揚は、京都も例外ではなかつたのである。

ただし、このような全国的な動向とは別に、京都では尋常小学校に唱歌教育を定着させた独自の動きがあつた。一つは、明治三一（一八九八）年一月に完成した、市歌「京都」^{六〇}である。この市歌の最たる特徴は、京都市小学校長会の決議によつて誕生し、同校長会が講習会を開くなどして普及させたという

五九 吉田恒三編前掲『京都音楽史』五頁。

六〇 京都の市歌はその後、明治三九（一九〇六）年、大正四（一九一五）年に作成されているが、いずれも公式な市歌ではない。現在の市歌（公式）は昭和二六（一九五二）年に作成されたもの。

点にある。作歌は国学者の黒川真頼、作曲は東京音楽学校教授上真行に依頼された本格的な唱歌であり、曲の狙いが「児童ヲシテ愛郷心ヲ勃興セシメ」ることに置かれた「教育原理ニ遵由（じゅんゆう）ニ従う」（引用者注）する「郷歌」として、きわめて教育的な意図を持つて作成された。活用方法は「朝ハ之ヲ歌曲ニ唱ヘタハ之ヲ音楽ニ聴キ知ラス識ラズ怡然（いぜん）喜びながら」（引用者注）愉快ノ裏ニ之（愛郷心—引用者注）ヲ鼓舞スル」とされており、その狙いが唱歌を手段とした愛郷教育・愛国教育であつたことがわかる^{六一}。この事実は、唱歌が教育の手段としてより重視され始めたということに加え、学校という近代化装置とその長である小学校長によつて「皆で歌う」という風習が教育現場から市井へと拡大され始めたことを意味する。この歌が単に尋常小学校の教授用にとどまらなかつたことは、単音だけではなく復音（和音）が用いられていることからもわかる（資料⑤）。前章で論じたような唱歌教育の「困難」がまだ残存していたと考えられる当時、唱歌が郷土歌として校外に出たことは、唱歌教育が市民権を得るにあつて重要な意義を持つ。また、市歌「京都」は管見の限りでは全国初の本格的な郷土歌である。かつて嶋田は、明治三五（一九〇二）年末における大阪の同様の事例を「社会の中の音樂と小学校唱歌教育がいち早く密接に結びつけられた例」と論じたが、京都はそれを四年あまり先行していたと言える^{六二}。

以上のように、日清戦争後には番組小学校において唱歌教育が定着しつつあつたと言えるが、その定着を決定的にしたのが、教育唱歌と郷土唱歌をミックスさせた『京都地理唱歌』（村上勘兵衛、一九〇〇年）と『京都歴史唱歌』（村六一）以上、『京都府教育雑誌』（七〇号、一八九八年二月）二五一～六頁を参照、引用。

六一 嶋田由美「郷土地理唱歌の隆盛と小学校唱歌教育—明治年間出版の郷土地理唱歌の分析を通して」日本音楽教育学会編『音楽教育学』（一四卷三号、一九九四年）一八頁。ただし、大阪市の場合は『大阪朝日新聞』による懸賞募集によつて歌詞が制定されるなど細かい事情が異なつており、京都市の場合と単純に同一視はできない。

上勘兵衛、一九〇一年)の登場である。

ただし、両唱歌が誕生した背景には、京都だけではなく全国規模での事情があつた。大ベストセラー『地理教育 鉄道唱歌 第一集』(以下『鉄道唱歌』と略)の発行である。明治三三(一九〇〇)年五月に大阪三木佐助によつて発行され、その後から飛ぶように売れた同書は、瞬く間に全国各地にその郷土版を派生させた^{六三}。京都においても当時の状況が、「唱歌(鉄道唱歌)引用者注)が大阪市三木佐助書店より四六半分版の冊子発行さるゝや、先づ之をブラスバンドを以て京都市中に宣伝し遂に全国至る所に普く宣伝せられたと称せられ、遂に此の形式の唱歌書が濫造された」^{六四}と語られている。この積極的な

「宣伝」は、単に『鉄道唱歌』を売るためだけになされたのではない。同書の内表紙の裏には、楽譜を差し置いて「山葉製風琴」「鈴木製ヴァイオリン」「楽器隊用楽器」の三木楽器による販売広告が掲載されており、奥付の次ページにはオルガンとヴァイオリンの絵、その下に三木楽器のカタログ無料進呈の広告が掲載されている^{六五}。すなわち、『鉄道唱歌』を流行させれば自社の広告を兼ねることができ、さらに唱歌を演奏するための楽器も売れる(その筆頭としてオルガンがあった)という発想のもと、積極的な営業戦略によつて『鉄道唱歌』は広まつたのである。

『鉄道唱歌』発行直後に編纂された『京都地理唱歌』『京都歴史唱歌』は、

いずれも作歌が京都府師範学校訓導岩内誠一、作曲が京都府師範学校助教諭楠美恩三郎である。岩内は明治三三(一九〇〇)年に京都で発足した関西文庫協会の会員であり、明治三五(一九〇二)年五月に生祥尋常小学校長として全国に先駆けて学校文庫を設置^{六六}するなど京都市教育界で活躍した人物である。

^{六三} 嶋田由美前掲「郷土地理唱歌の隆盛と小学校唱歌教育——明治年間出版の郷土地理唱歌の分析を通して——」一六一八頁を参照。

^{六四} 吉田恒三編前掲『京都音楽史』七頁。

^{六五} 大和田建樹『地理教育 鉄道唱歌 第一集』(三木佐助、一九〇〇年) 内表紙の裏、奥付の次頁。

^{六六} 生祥校の児童文庫については、木村稔「児童文庫の誕生——明治期における

楠美は市歌「京都」の講習会の講師を務めるなど市教育界と関わりが深く^{六七}、後の第二期国定教科書『尋常小学唱歌』編纂のメンバーとして知られる。両唱歌は『鉄道唱歌』と同じく七・五調の馴染みやすい单音メロディーで構成され、『鉄道唱歌』が全六六番なのに対し『京都地理唱歌』は全四〇番と若干少なめだが『京都歴史唱歌』は全六二番あり、縦横のサイズは両書ともに『鉄道唱歌』と全く同じ、表紙と本文のデザインも瓜二つ、値段も同じ六錢、巻末広告にオルガンの絵付広告が掲載され広告主が出版元というところまで共通する。つまり、両唱歌が『鉄道唱歌』の影響によつて作成されたことは間違いない^{六八}。

ただし、すべてが『鉄道唱歌』の類似というわけではない。まず、『鉄道唱歌』には数字譜がなく、曲が上真行作曲と多梅稚作曲の一バーターン掲載されている。一方で『京都地理唱歌』『京都歴史唱歌』には数字譜が付けられ(資料⑥)、曲は楠美作曲の一バーターンのみである。これは、教育現場で使いやすく、かつ混乱しないよう配慮がなされたことだろう。また、岩内による『京都地理唱歌』の緒言には「こは我京都市の児童の為めに諷唱(ふうしよう)引用者注)の際に郷土地誌の梗概(きょうがい)引用者注)を知らしめんとて作りたるものなり」^{六九}、『京都歴史唱歌』の緒言には「本書につきての補助は前編と

る京都市小学校の歩みをたどりながら」渡辺信一先生古稀記念論文集編集委員会編『生涯学習時代における学校図書館パワー——渡辺信一先生古稀記念論文集』(日本図書館協会、一九九一年二月)二六頁を参照。

^{六七} 『京都府教育雑誌』(七〇号、一八九八年二月)二六頁。

^{六八} 問題は、それがいかなる影響なのかである。本稿の射程はあくまで京都市なので詳しく述べることはしないが、全国的に『鉄道唱歌』類似本が大量派生した要因には、単に教育者が唱歌の教育的効果を狙つたということだけなく、楽器販売所によるしたたかな営業戦略があつたのではないか。同時代がオルガンなどの楽器販売の拡大期であつたこと、そしてそれとともに唱歌が広く定着したこと考慮に入れなければならない。

^{六九} 前掲『京都地理唱歌』緒言。

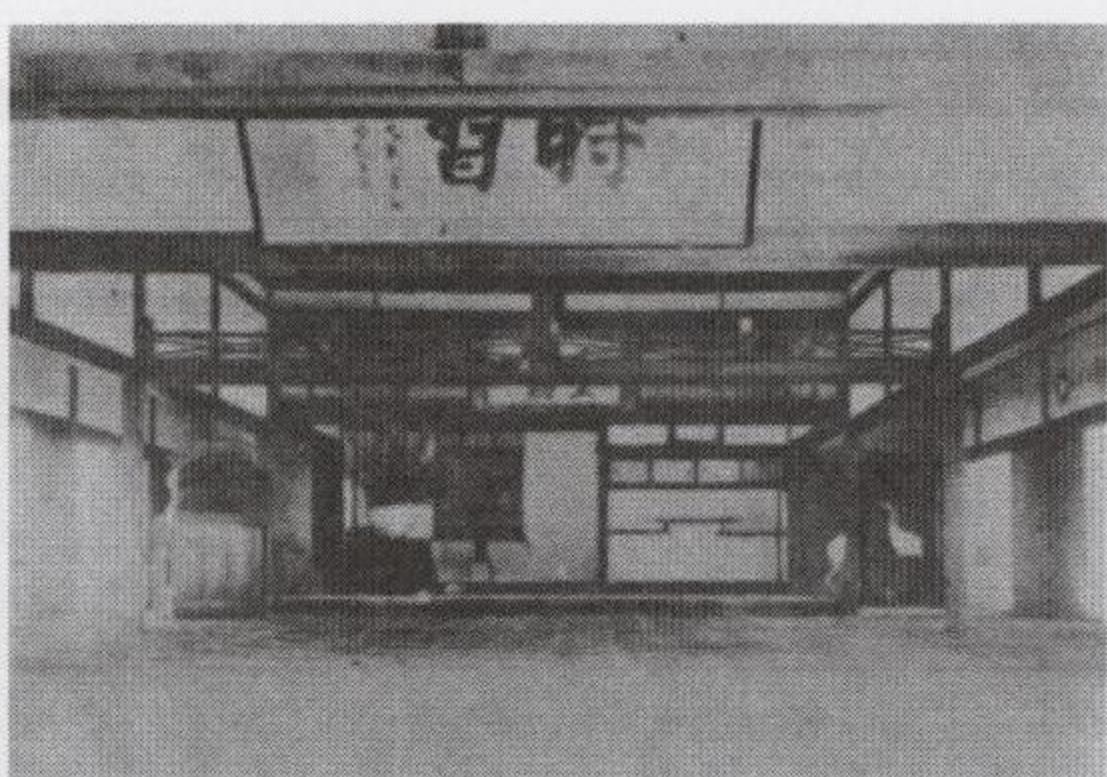
異なるなし」^{七〇}とあり、教育的効果を狙つてゐることは明確である（ちなみに『鉄道唱歌』ではこの緒言の部分が広告になつてゐる）。

以上のように、明治三一（一八九八）年には教育界発の市歌「京都」が誕生し、さらにその二年後には『京都地理唱歌』『京都歴史唱歌』が相次いで製作された。前者は唱歌が学校外に出て市民権を得るために切り札、後者は学校現場における格好の唱歌定着ツールであつたと考えられることから、番組小学校における唱歌教育は明治三〇年代前半（一八八七—一九〇一年）において定着したと言えるだろう。

おわりに

以上、番組小学校における唱歌教育がいつ、どのような経緯をたどり導入されたのか、考察してきた。最後にこれまで述べてきたことをまとめておきたい。

京都における唱歌教育導入ルートは、明治一〇（一八七七）年前後においては京都ホーム（後の同志社女学校）および京都女学校（後の京都府女学校）のみであった。同時期は中央でも唱歌制定に向けてようやく動き始めた頃である。小学校での唱歌教育導入にあたつて京都と中央との結びつきが生まれ、その活動が進展したのは、明治一六（一八八三）年に京都府女学校の教員が音楽取調掛での伝習を終えてからである。伝習の成果はすぐに發揮され、特に明治一九（一八八六）年の婦人唱歌研究会開催は、番組小学校への唱歌教育導入の大きな転機となつた。明治二〇（一八八七）年には簡易なカリキュラムが整備され、番組小学校における唱歌教育が始動する。しかしそこには、教え手不足と楽器不足、加えて唱歌を教育することの意味がいまだ市民権を得てないという困難がともなつてゐた。それらの困難を乗り越え、番組小学校において唱歌教育が定着したのは、日清戦争後の明治二九（一八九六）年から同三〇（一九〇一）年にかけてであつた。



資料①

日彰校の講堂。撮影年不明。左にオルガンが写っている。（『日彰百年史』扉絵）



資料②

「天長節」と「クリスマスの歌」

本稿の意義は、京都番組小学校における唱歌教育に射程を定め、唱歌教育に必要な情報がどのような伝達ルートで流れ、どのようにして教育の環境が整えられてきたのかを歴史的に明らかにした点にある。京都番組小学校における唱歌教育の導入は単なる国家プロジェクト推進の結果ではなかつた。「上からの」唱歌教育普及以前に同志社女学校及び京都女学校での唱歌教育と府学務課の働きがあり、かつ婦人唱歌研究会という京都独特の動きや、全国に先駆けての本格的なオリジナル唱歌の作成があつた。他方では、楽器販売業者の巧みな営業戦略も唱歌教育導入の推進力となつていた。京都では以上のような複合的な要素によって、唱歌教育が小学校に導入されていったのである。

ただし、今回扱つた資料は明治期の番組小学校についてのすべてではない。各学校関連資料は未整理のものが多く残つてゐる。これらの資料に基づいた考察と、唱歌教育導入における他地域との比較検討、番組小学校の歴史における唱歌教育導入の位置づけなどについては、今後の課題としたい。



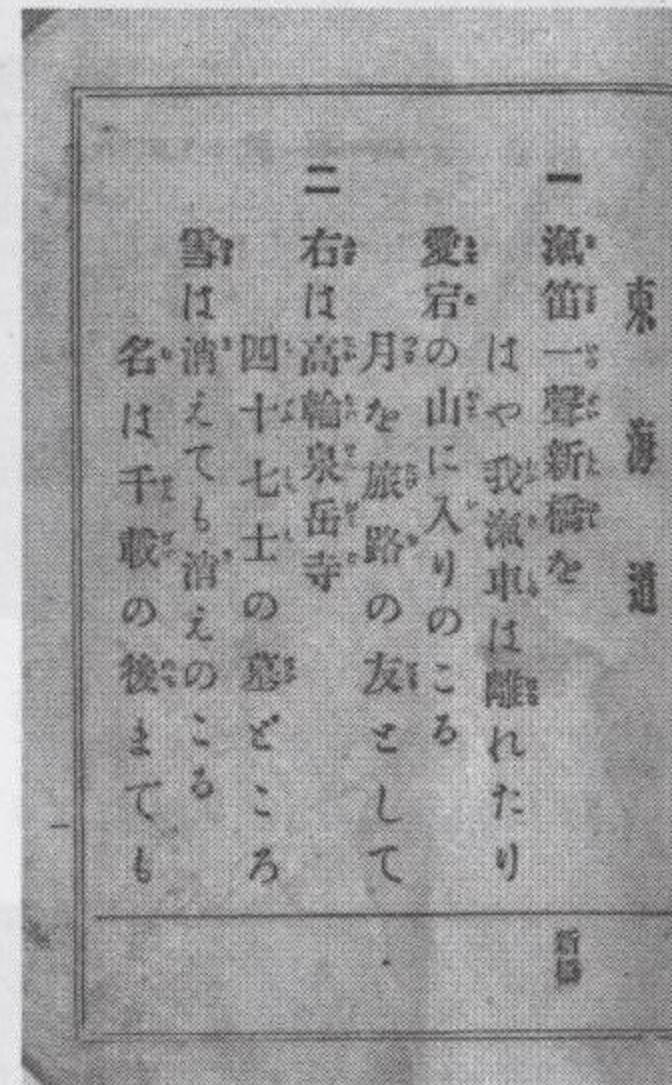
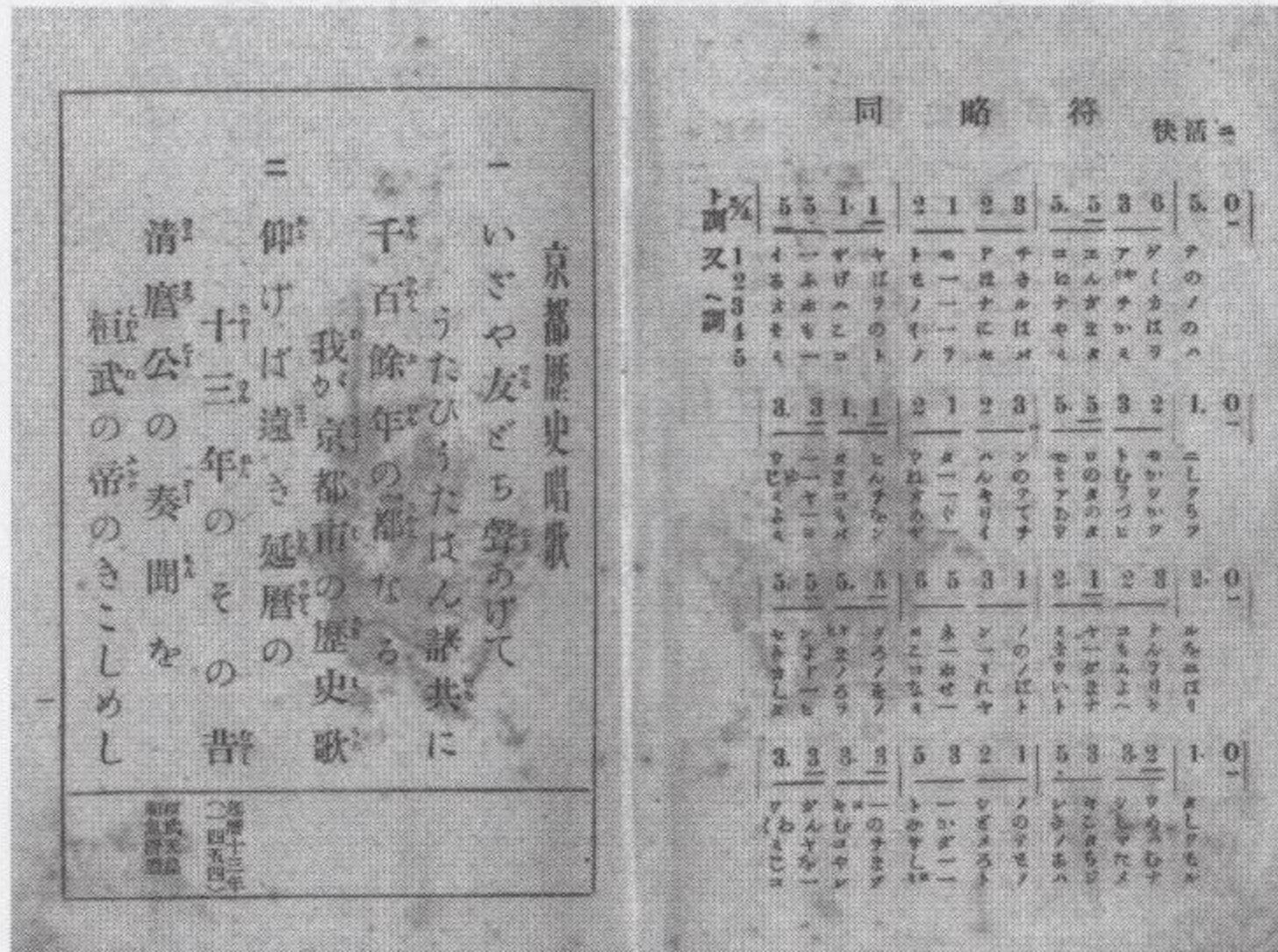
資料⑤
市歌「京都」(『京都音
楽史』6頁)



資料④
三木書店楽器部の広告



資料③
紙腔琴の広告。上にはアコーディオン、右にはヴァイオリンの広告もある。(『新編 教育唱歌集』1896年)



資料⑥
右が『鐵道唱歌』、左
が『京都歴史唱歌』。

平成二十四（二〇一二）年度における団体見学の現状と課題

小中秀則 車田秀樹

はじめに

当館の団体見学は次のようにある。

平成二十四年度の一般団体見学で多いのは視察や研修を目的とする教育関係者の利用である。教員に限らずとも学校関係者にとって学校の歴史を知ることは仕事の範囲を超えて関心の対象となるものと思われる。

次いで、社会教育の一環として「一般教養としての京都の学校の歴史を学ぶ」ことを目的とする社会教育団体による利用があげられる。

社会の高齢化が進む中、元気で知識欲が旺盛な高齢者が増加しているといわれる通り、この団体は年齢層が高く、活動的である。そしてまた、名所旧跡を訪ねるだけでは飽き足らず、これまであまり取り上げられることはなかつた歴史的・文化的な価値を持つものへの関心も高いという。そういう要求に対し主催者側も隠れた文化財や建造物などを紹介している。本館も歴史的な建造物を利用した博物館として取上げられるようである。本館についての予備知識なしで訪れた方も、木製の机や椅子、教科書や給食の展示を見て自分の学校時代を懐かしむと共に、京都の学校の歴史に特化した展示や取り組みの独自性に対して認識を新たにする人は多い。今後も、生涯教育の普及や知識基盤社会を反映して同種の需要は増えるもの

と思われる。

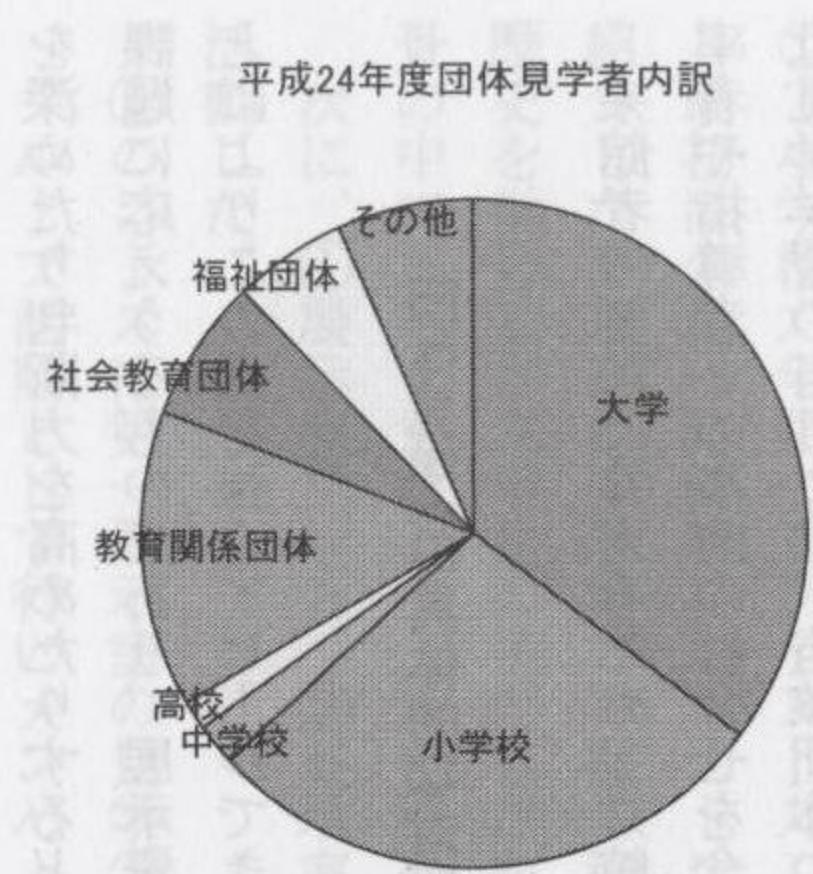
三番目は、地域社会との連携を目的とするデイケア活動等の福祉団体による利用である。学校は誰もが通過してきた場所であり、木製の机や椅子、教科書などはみんなが経験を共有している場所である。教科書の部屋では国語の教科書を読み出す人や音楽の教科書を広げて歌いだす人、自分の学校生活を話しうるなど様々な姿が見られる。その表情からは、自分の学校生活の思い出に浸る穏やかな心情がうかがえる。昔の教科書や机・椅子、学校の様子を映していくパネル写真などが個々人の記憶に刺激となり、過ぎた日を懐かしく蘇らせているようである。

学校団体としては「学校の歴史を学習する」場として利用する例が多い。当館の展示を、歴史学習の教育史的な場面の補充素材とし、具体的な展示物を通して近代教育の創設期から現在に至る経過を学習することを目的としている。

小学生の場合は地域学習の補充教材や単元学習の初期に課題発見のため、もしくは中期の課題解決、あるいは、後期の発展学習としてなど、様々な活用が見られる。さらに、総合的な学習の中で扱う場合は展示している具体物や写真などの学習素材が子どもたちの自主的な活動を促すことを期待しているようである。

大学生の場合は、指導者の講義の補充として具体物の持つ教育的效果を活用すると共に、京都の学校に特化した展示内容の独自性が明治期の近代教育創設期を学ぶ教材としての学習者に働きかけるインパクトの強さに着目しているものと思われる。

当館での学習は、単に知識を得るだけでなく、課題を見つけ、調査し、考え



を深めたり判断力を高めたりするといった学校教育に求められている今日的な課題に応えうるものであり、展示資料を中心とした学習モデルを提案することによりこの点を強くアピールできると考えている。

一 団体見学への具体的な対応

来館者の要求に答えるため、来館の目的に沿った活動ができるように団体引率者や指導者との事前の打合せを念入りに行うことの大切にしている。当館では見学学習の当日には、当該団体の見学の目的に沿えるように展示品の解説をしながら各部屋を案内して回ることが、望ましく効果的であると考えている。解説者が一緒に回ることで来館者に展示の観点を明確に示すことができ具体物の持つ教育的な価値を最大限に引き出すことができる。また、学習者の意識の揺れを直接的に感じることで補足の説明を追加することができ、不明な点などがあればその場で応答することが可能であり、学習の満足度が高くなると思われる。学校団体の場合は、小学生は学年やクラス単位、大学生は当該教授が受け持つ講座受講者単位で来館するが多く、人数によつては全員を案内して展示室を回ることが難しくなる。

当館では、多人数の団体に対しても最初に見学前のオリエンテーションを行っている。展示品を含めた館の概略を説明した後、小グループに分かれて展示室を個人もしくはグループで見学する形をとつていて。小学生は当館作成の「たんけんノート」(資料①)を持ち、問題を解きながら展示室を見学して回るよう勧めている。問題に示された展示品を探しながら子どもたちが当館の伝えたい事柄に迫っていくことをねらいとしている。大学生は指導者から課題を与えており、個々の課題にそつて展示資料を見学している。当館の担当者も展示室内に待機して学習者の個人的な質問に答えている。見学後に質疑の時間を設ける場合もある。

理解を助け学習意欲を高めるてだて

①見学前オリエンテーション

見学前のオリエンテーションでは、当館の展示物、事業及び施設の概要などについてプレゼンテーションを行っている。展示コーナーのテーマと主な展示物をスライドで示しながら歴史的な背景なども加え解説をしている。特に、当館の中心テーマである京都の番組小学校が全国に先駆けて手がけた事業であること、そこには学校と地域の人々とのつながりの深さがあり、それが原動力として大きく作用したこと、また、学校を支える地域の人々の思いは今なお連綿と続いていることなどを意識できる見学になるようにしたいと考えている。

②小学生向け解説カードの配置

本館は学校博物館の名のとおり、明治二年の番組小学校の創設時の貴重な文書、教材・教具などの備品類や教務関係の書類、教科書などの図書類、作者や地域から寄贈された美術品類など、全て学校から収集したものである。オルガンやピアノなどの実物や学校給食のサンプルなどの具体物のように、見ることで時代がわかり感じることができるものと、明治初期の文書類などのように解説文がなければ解説が困難なものが混在している。掲示している解説文は一般来館者を想定した小・中学生には難しい文章となつていて、小学生の理解を助けるため平易な文章で書いたカードをコーナーごとに設置している(資料②)。平成二四(二〇一二)年度は全面的に見直し、学校に持ち帰った後も学習資料として活用できるように、解説文に写真を入れたカードを設置した。

小学生向けと書いているが、大学生や一般来館者の中にも手にとつている人がある。

③見学のてびき 「たんけんノート」

展示物が持つている価値の捉え方は個人によって様々であり、一人ひとりの感性は大切にすべきである。しかし、歴史的な資料はその背景を知ることでも違った見方ができる。特に歴史を学習中の子どもに対して展示物の見所やポイントはしっかりと見て、感じ、考えてほしいと願つていて。当館では、ポイ

ントとなる展示物については問題を示し、それを解きながら順に見学していく。ように博物館「たんけんノート」を準備している。当館からの一方的な価値の押し付けにならないように、クイズを楽しみながら学校の歴史への理解を深めていくように配慮して作成している。

「たんけんノート」は4種類あり、入門編、中級編、上級編、一般編と小学生から中学生まで対応できるように準備している。平成二四（二〇一二）年度は高校生の使用もあった。

④体験学習

当館では昔の番組小学校で行われていた「読む」と「書く」の体験学習を実施している。明治時代の教科書を読んで、文字を書く学習である。今の子どもには読めない歴史的仮名づかいの文字を現代の仮名づかいに直して読むことになる。「書く」は、歴史的仮名づかいの文字を石盤で石筆で石盤に書いていく。

石盤や石筆を使ったことは勿論見たことさえない子どもたちであるが、書く消すを何度も繰り返しながら昔の学校や学習を想像することができればと考えている。

二 団体見学の実際

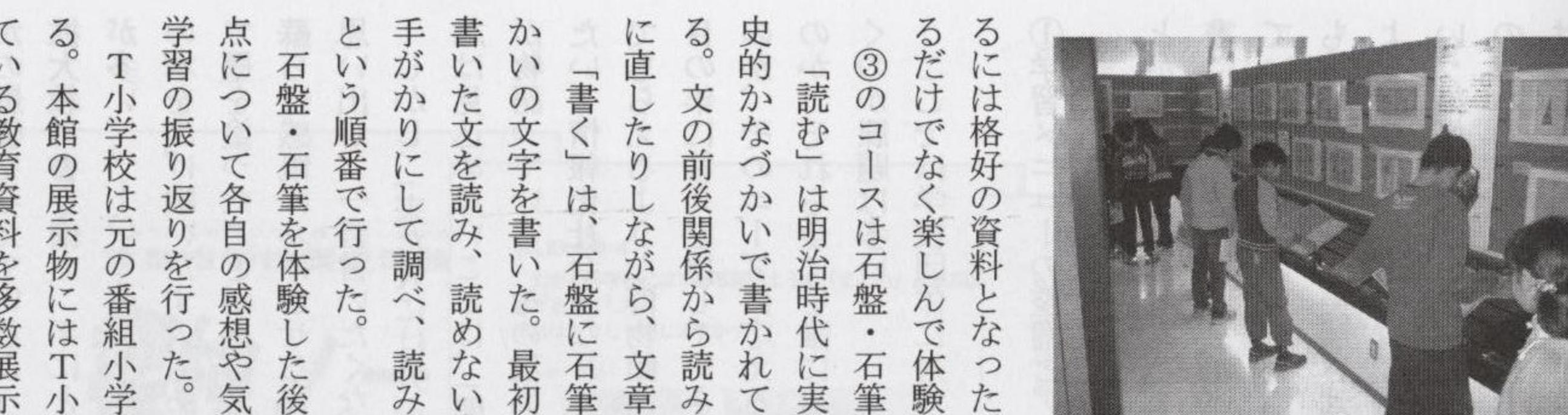
○T小学校六年生 三クラス 八二名

最初に全員一緒にオリエンテーションを行い、当館の各コーナーの展示物を紹介しながら京都の教育の特徴や移り変わりの概略が捉えられるようにした。

歴史を学習した六年生の子どもたちには、京都の教育を明治時代という時代背景の中で理解できるように話を進めていった。

次に、①展示室見学A、②展示室見学B、③体験学習の三コースに分かれて活動した。

①のコースは第一展示室の見学学習である。



「編」の問題を解いていった。「たんけんノート」は問題を順に解いていくと番組小学校の創設から現在に至る経過が順を追つてとらえられるようになっていったものである。

②のコースは第二・三・四展示室の見学学習である。



第二・第三展示室では企画展「学びの道具大集合—むかしの道具で科学を知ろう」を開催中であった。今学校では使われていない、見られない教材・教具もあり、今昔の違いを見つけるには格好の資料となつた。また、理科や算数の教具体験コーナーもあり、見

るだけでなく楽しんで体験できる学習となつた。

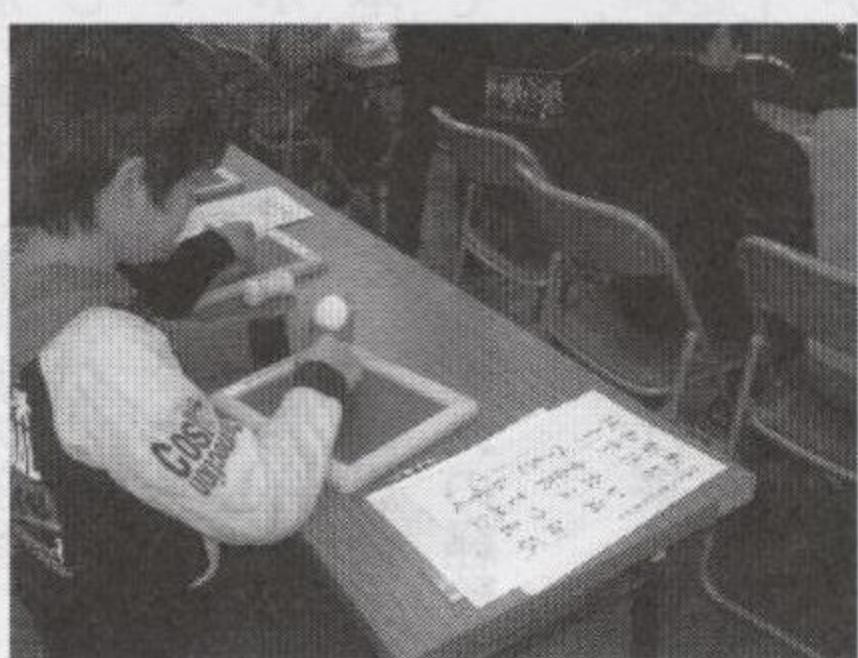
③のコースは石盤・石筆の体験学習である。

「読む」は明治時代に実際に使われていた「作法書」を読んだ。作法書は歴史的かなづかいで書かれているため、今の子どもには読めない字が使われている。文の前後関係から読み方や意味を想像したり仮名づかいを現代仮名づかいに直したりしながら、文章を読んでいった。

「書く」は、石盤に石筆を使って歴史的仮名づかいの文字を書いた。最初に歴史的仮名づかいの文字を書いた。最初に歴史的仮名づかいの文字を書いた文を読み、読めない字は「指教図」の絵を手がかりにして調べ、読み方の分かった字を書くという順番で行つた。

石盤・石筆を体験した後、昔と今の学習の相違点について各自の感想や気づきを交換することで学習の振り返りを行つた。

T小学校は元の番組小学校を統合した学校である。本館の展示物にはT小学校の元校より預かっている教育資料を多数展示している。子どもたち



にとつて学校の歴史や伝統を学びながら学校と地域の人々とのつながりを強く感じる時間となつたようと思われる。

○K大学 発達教育学部児童学科 三五名×三回

最初に見学前のオリエンテーションを行つた。展示物の説明の中に地域の人たちの学校に寄せる思いを紹介しながら京都の教育への理解を深めていくよううにスライドを多用したプレゼンテーションを行つた。

オリエンテーションの後は個々人の課題に沿つて自由に館内を見学調査していった。当日は、展示室のオルガン（燭台付風琴）演奏も実施していたので、普段聞くことのない音色に耳を傾けながらの見学となつた。中には演奏者にオルガンの起源や機能を熱心に質問する学生もあつた。

日本の幼児教育はフレーベルの教育理論を取り入れて始まり恩物（教育玩具）が使用された。幼児教育を専攻する学生であつたので、別室に本館所蔵の恩物を体験できる場を設定した。多数の学生が興味深げに手にとり体験をしていた。「展示物を見る」に「実物を体験する」を加えることにより関心が深まり積極的な活動に結びついたものと思われる。



終わりに

最後に、来館者増加のための情報の発信・アピールの工夫について述べておきたい。

多数の来館者から当館の資料の価値や展示のユニークさを評価する声を聞く。明治二年に創設された六四校の番組小学校の資料を中心にしており教育史的にも貴重な資料を備えていることに加え、元は小学校であった施設をほぼそのまま利用していることなども昔の学校の持つ独特の雰囲気が来館者に何らかの影響を与えているように思われる。特に第一展示室内「教科書の部屋」は拡大教科書を備え、手にとつて閲覧できるようにしてあるため立ち止まる人が多い。ページをめくりながら真剣に読みふけっている人もある。音楽（唱歌）の本を広げ歌いだす人もある。墨塗りの教科書を示して自分も先生から言われて墨を塗つたことがあると話している人もいる。本館の展示品はその思い出を蘇らせ感慨にふけさせる作用があるようで、それぞれの人がそれぞれの経験を思い出し、一言言いたくなるところであるようだ。

しかし、「来た人には分かってもらえるのだが」という思いだけでは来館者増加は見込めないことは、「開館以来、来館者は期待したほど増えなかつた」現実が物語っている。その現実を直視し、何が足りなかつたのかを館として反省したい。情報化社会となり、さまざまな情報があふれる中からわざわざ足を運んでもらえるような博物館にするには何が必要なのか、開館一周年を迎える節目の年に答えを出していきたい。当館に対してどのような潜在的ニーズがあるのか、そのニーズに応えるには何が必要か、選んでもらえる情報とはどんなものか、それら全てを誰に対してもどういった手段で発信していくのか課題は多い。

ここでは学校団体に対するアピールについて考えていく。

①学習メニューの整備とアピール

まず、学校のニーズを探り、校種ごとのニーズにあつたメニューを備えることが必要であると考える。現在京都市の小学校で採用されている社会科の教科書に当館を取り上げた記述があるが、博物館学習を学校現場で積極的に取上げている例は少ない。学習指導要領の改訂による授業時数の増加もあり各学校とも教科学習を補充発展させる校外での見学学習の時間確保が難しくなっている。各校の教育課程に載せられていないため、教科書に記述があるという絶好の機会が生かされない状況である。この現状を打破するためこれまでの待ちの姿勢からの転換を考えたい。当館を利用した学習を教育課程に位置づける指導案を作成し、学校現場に働きかけることも一方方法であり、学習メニュ

ーを持つて学校現場へアピールしていくことは利用拡大のための第一歩と考える。

②来館者のニーズにこたえる展示の工夫・改善

本館の展示は、若干の移動があつたものの、開館以来あまり大きな変動がなく現在に至っている。子どもから大人まで幅広い来館者が見やすい展示になっているのかどうか、もう一度見学者の視点に立つて見直してみたい。また、解説文はどうか。外国からの来館者に対して十分とはいえないところがあるだけでなく、漢字にルビがなくて小学生だけではなく大学生にも読みづらいと聞くことがある。このような点を来館者それぞれのニーズに合う展示へと改善していくことも必要であると考える。

③小・中学生の来館を促すには教員から

大学生の場合には授業で出された課題に対して指導者の勧めもあつて来館することがあるが、小学生や中学生が単独で来館することはあまりない。時々、学校で出された課題を調べるために親と一緒に来館することがあるところを見ると、宿題なり課題なりを調べる時の担任教員からの言葉かけが来館を促すきっかけにつながるものと思われる。各校の教員一人ひとりにもつと積極的にアピールし周知を図っていきたい。近くに教育センターがある利点を生かし教員研修会のときにアピールの時間を設定することや、電子メールで個々の教員宛に広報を発信していくことなども考えられる。まず教員に対して、本館の展示物の教材としての価値を理解し認識を深めるよう積極的に働きかけていきたいと考える。

京都市学校歴史博物

探検ノート

＜中級編＞

わたしは金次郎です。
わたしといっしょに、学校歴史博物館の探検に出かけましょう。

名前() 小学校 年()

もんだい(中-4)
むかしの学校には下の写真のような「まとい」とよぶ道具がありました。
それはどうしてでしょうか?

まとい

もんだい(中-5)
番組小学校を運営するために小学校会社がつくられたところもあります。会社をつくる費用は、地域の人が分担して出しました。
地域の人が出したお金のことを何と呼んでいたのでしょうか?

町内費
学校費助金
電金

資料① 探検ノート中級編

【映像ホール】

番組小学校は143才になりました！

明治5年、今から140年ほど前、日本中に小学校をつくるきまりができました。

その時、すでに京都では子どもたちは小学校に通っていました。日本中に小学校ができる3年も前に、地いきの人たちが力を合わせて番組小学校をつくっていたからです。

番組小学校は今年143年目をむかえました。



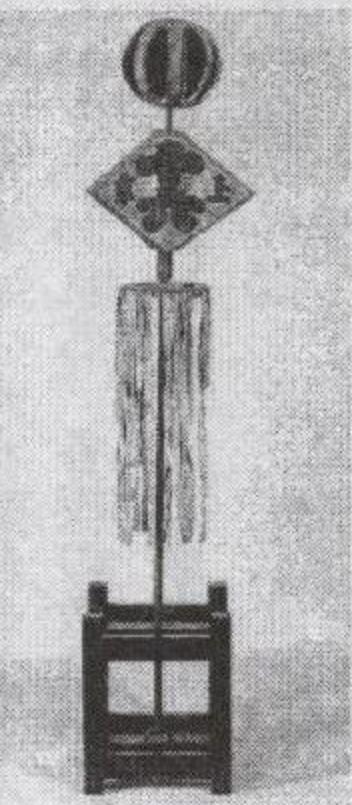
【③番組小学校の役割】

学校と消防

まといは火事場で使われた道具です。早く火を消してほしいと心配している人たちに、火を消す仕事が始まったことを知らせるために使いました。

まといは遠くからでもよく見えように屋根の上に立てました。

むかしの小学校には消防道具を入れる倉庫や消防の仕事をする人の部屋がありました。



21

【新時代と学校教育コーナー】

ピアノとオルガン

むかしの学校では音楽を唱歌といいました。学校で唱歌の授業が始まったのは明治20年ごろからです。そのころオルガンを風琴、ピアノを洋琴と呼び、どちらも日本ではまだ作られていませんでした。それで子どもたちのために地域の人々がお金をして外国から高い値段の西洋楽器を買って学校に贈りました。

展示してあるのは明治43年に地域の人から元日彰校に寄贈された国産第16号風琴と大正12年に開智小学校に寄贈された外国製のピアノです。どちらも弾くとむかしのようにきれいな音色が聞こえます。



【映像ホール】

どうして「番組小学校」というのだろう？

京都ではむかしから何軒かの家が一緒になって町をつくり、いくつかの町が集まって町組をつけていました。明治時代になって、上京に33、下京に33、合計66の新しい町組ができました。これを番組とよびました。

この番組に1校ずつつくられた小学校なので番組小学校といいます。

(上京・下京ともに2つの番組が一緒になってつくった小学校が1校ずつあるので、番組小学校の数は全部で64になりました。)



資料② 小学生向け解説カード

久保田米僕が描いた二つの遊戯図——唐子と園児——

森光彦

はじめに

久保田米僕（一八五二—一九〇六）は明治期に活躍した人物である。京都に生まれ、鈴木百年の門下に学んだ後、幸野模嶺らとともに画壇の第一線で絵画制作を行つた^①。明治十三（一八八〇）年の京都府画学校建設への尽力、同二十（一八八七）年明治宮殿造営に際する天井画などの制作、同二十二（一八八九）年パリ万博への出品に対する金賞の受賞、同二十七（一八九四）年大本營における明治天皇の御前での揮毫など、その業績からも美術史上の重要な人物であることは疑いない。しかし、先行研究において米僕作品について語つたものは少なく^②、特に米僕の肉筆画の絵画的特性が十分に検討されたことはない。

ここでは、久保田米僕が描いた二つの掛幅である《唐子遊び図》（図1）《園児遊戯図》（図2）を取り上げる。これらは、京都市立尚徳中学校に伝來したもので、同校の閉校後に京都市学校歴史博物館が管理するところとなつた。この二つの作品は、その大きさや材質、落款の共通性やその位置に加えて、描法も通じることから、同時期に、対になるものとして画家が制作したと考えられる。そこで、本稿ではこの二作品の概要、絵画的特性の紹介を通して、米僕はなぜ二つの遊戯図をあわせて描いたのかという問題を考えてみたい。

《園児遊戯図》は紙本淡彩の掛幅であり、寸法は縦一四〇・〇センチ、横九五・〇センチを算する。図は幼稚園での唱歌遊戯の場面を写したもので、風琴（オルガン）を演奏する女性、笏拍子を打つ女性、足を上げて踊り方を教えている女性という三人の保母の間を、幼稚園児たちが一列になつて歌い、踊りながら進んでいる。画面右下に「米僕画」の款記、朱文方印「簡伯氏」（挿図2）がある。この作品もまた速い筆づかいで人物表現に力を入れ、多数の登場人物の表情を巧みに描き分けており、大きな声で歌う子供たちの楽しい雰囲気がよく伝わってくる。画面全体を使って子供たちを行進させるという動きのある構図となつていながら、バランスよく配された三人の保母が画面の重心となり、一体感のある安定した構図となつてている。そして、この作品においても、かなり衣装や道具などを詳細に描くことに執心していることが分かる。子供たち

一 《唐子遊び図》と《園児遊戯図》について

《唐子遊び図》は紙本淡彩の掛幅であり、寸法は縦一三九・〇センチ、横一〇一・〇センチを算する。図は中国風の衣装を着た五人の子供たちが遊ぶ姿を

表したものである。画面左下に「米僕写」の款記、朱文方印「簡伯氏」（挿図1）がある。唐子は近世には狩野派や円山派によつてよく描かれた画題で、本作ではその面貌表現から、円山応挙や長沢芦雪などの描き方に倣つたものであると思われる。人物を大きく描き、速さのある筆づかいで表情やしぐさをいきいきと豊かに表している。画面右の花かごから一輪の芙蓉を取る人物はこの遊びの中心人物である。その体は他の四人に比べて少し大きく、表情は落ち着いて描かれるなど年長者として表現されている。他の子供たちはいかにも楽しげにこの年長者を取り囲み視線を向けている。このように、年長者を中心として人物の視線を集中させることによって一つの遊びをまとまりよく表現している。また、子供の衣装を正確に描こうと意識している様が見て取れる。さまざまな髪型、服の文様、装身具などが描き分けられ、背景がなくとも唐子であることがはつきりと分かるようになっている。

《園児遊戯図》は紙本淡彩の掛幅であり、寸法は縦一四〇・〇センチ、横九五・〇センチを算する。図は幼稚園での唱歌遊戯の場面を写したもので、風琴（オルガン）を演奏する女性、笏拍子を打つ女性、足を上げて踊り方を教えている女性という三人の保母の間を、幼稚園児たちが一列になつて歌い、踊りながら進んでいる。画面右下に「米僕画」の款記、朱文方印「簡伯氏」（挿図2）がある。この作品もまた速い筆づかいで人物表現に力を入れ、多数の登場人物の表情を巧みに描き分けており、大きな声で歌う子供たちの楽しい雰囲気がよく伝わってくる。画面全体を使って子供たちを行進させるという動きのある構図となつていながら、バランスよく配された三人の保母が画面の重心となり、一体感のある安定した構図となつてている。そして、この作品においても、かなり衣装や道具などを詳細に描くことに執心していることが分かる。子供たち

列は前方から和服を着た子供と洋服を着た子供が交互に置かれ、できるだけ明治期の衣装をバラエティ豊かに描きとどめようとする意気込みが伝わる。

これら二作品には、子供がいきいきと遊ぶ姿が描かれ、〈楽しさ〉が共通して表現されている。一つの遊びに対し寄り合つて、無邪気にはしゃぐ姿が同様に見て取れ、普遍的な子供の姿を感じさせるものであるといえる。これが、両者に通じる主題であろう。米僕はそのような普遍的な子供の姿を明らかにするために、二つの作品間において円山派風の面貌表現や年長者を中心として子供たちを展開させる構図という点で共通性を持たせている。また、その上で子供の衣装など風俗表現をそれぞれはつきりと正確に描いている。一方は唐風の衣装、一方は明治の衣装としつかりと描き分けながら、子供の表情などに共通性を持たせるという工夫によつて、鑑賞者は「時代や国が異なつても、遊ぶ子供の姿は通じ合うものだ」と感じる。このように、米僕には二つの作品が比較された上で、主題が明らかになるという狙いがあるのだ。

二 贈られた場所、楊梅幼稚園

『唐子遊び図』『園児遊戯図』が伝来したのは京都市立尚徳中学校であった。尚徳中学校は明治一（一八六九）年に開校した下京第十六番組小学校の系譜に連なる学校である。米僕は明治七（一八七四）年の新校舎落成の記念に『孟母断機図』という掛幅を制作して贈つており^③、尚徳の地域とは縁が深かつたと考えられる。描かれたモチーフを考慮しても、この二作品も同様に尚徳校のために制作し贈った可能性が高いと考えられよう。実は、『園児遊戯図』を贈るのに相応しい場所が尚徳校の中に存在した。明治二十一（一八八八）年に尚徳校の敷地内に開園した幼稚園である。設立当初は尚徳幼稚園と称していたが、すぐに楊梅幼稚園の名に改められた。『園児遊戯図』はこの楊梅幼稚園で行われた唱歌遊戯の写生をもとにした作品ではないだろうか。そう考えた時、二作品の制作時期はこの幼稚園が開園した明治二十一（一八八八）年から、米僕が明治二十三（一八九〇）年に東京に拠点を移すまでの間に制作されたと推

定できる。当時先進的な施設であった幼稚園、そこで行われる遊戯を代表する

ものであつた唱歌遊戯を文明開化の喜びをもつていきいきと描きとどめ、贈つた。それが『園児遊戯図』なのだと考えられるだろう。では、『唐子遊び図』はどうか。唐子の姿は元来、中国などでは百子図などに登場し、多くの子供を描くことで子孫繁栄を願う吉祥のモチーフとして描かれていた。日本でも布袋などと一緒に描かれることが多く、吉祥的な性格を持つものであつたと考えられる。『唐子遊び図』では一人の唐子が象徴的に芙蓉の花を持って描かれている。芙蓉は榮華の象徴とされ、吉祥のモチーフとして好まれた。このことから、『唐子遊び図』もやはり全体として吉祥的性格の強いものであると考えられ、唐子にも祝意が込められていたと考えられる。幼稚園に贈つたものであつた場合、子孫繁栄というよりも子供の健やかな成長を願つたものであつたと考えたい。

以上のように幼稚園との関係のなかで考へると、それぞれの作品は贈られるに相応しい画題であったことが理解でき、特に不思議ではない。しかし、これらはそれぞれ独立したものとしてではなく、対として考へられたものである。両者の画題は「子供」という点で共通しているが、唐子は身分の高い中國人物を描く格調高い画題であり、一方園児は市井の、當世風俗を描くものであつた。

当時の常識ではこの二つが対として描かることは極めて珍しいことであつたと考えられる。では、なぜ米僕はこの二作品を対にしたのだろうか。二作品が米僕にとってそれぞれどのようなものであつたかを見た上でその関係について考へたい。

二 時世粧を描く『園児遊戯図』

米僕は幕末に生まれた。明治初期に画家として活躍し始め、日清、日露戦争を体験し、明治終わりごろの三十九（一九〇六）年に没した。まさに、明治という時代を生きた人物であるといえよう。画家として意欲に燃えていた頃、文明開化で急速に変わっていく世界に直面し、文明の発展への喜びと希望を強く

感じていたに違いない。その喜びを表すように、米僕は自身が見た明治期の先進的な出来事や文物を多く描いている。最先端の技術で作られた軽気球（《京都学務課製造軽気球試験之図》、一八七七年）や、最新の盛り場であった新京極の町並みなどを写した作品（《明治新撰西京繁昌記》、一八七七年）が挙げられる。他にも、明治に始まった郵便局の様子を《郵便現業絵巻》（通信総合博物館蔵）に描いたもの、明治二十六（一八九三）年のシカゴ万国博覧会に参加した時に会場の様子を写し、《閣龍世界博覧会美術品画譜》として出版したものがある。これらと同様、《園児遊戯図》もまた、先進的な画題であつた。洋服に身を包んだ園児たちが、オルガンの伴奏で歌い踊る様子は新たな時代の始まりを象徴するものであつただろう。管見の限りでは、この時期に幼稚園での唱歌をモ

チーフにした肉筆の作品は本作の他にない。米僕が先進的な事物に積極的に関わろうとしたことが分かる。この作品において米僕が意識して行つたことは、円山応挙や長沢芦雪などが用いた描法で、幼稚園児という時世粋（当世風のすがた）を表すようなモチーフを表現することであつた。それにより、園児たちの喜びや無邪気さといった性質まで伝わる、深い人物表現を行い、画面全体に《楽しさ》を充溢させたのである。伝統的な円山派の画技を駆使しながらこれまでにない新たなモチーフに挑戦している。そこに米僕の画家としての革新性があるといえるだろう。《園児遊戯図》とは、そのような挑戦的姿勢がよく表れた作品だといえる。

四 「有職故実の米僕」と《唐子遊び図》

米僕は明治十七（一八八四）年、第一回内国絵画共進会において、豊臣秀吉の名古屋陣中での逸話を描いた《臘月夜》を出品し、銀賞を受けた。それを契機に全国に名を広めることとなつた。それ以来、歴史画を得意として多く描いたという。歴史画を描くに当たつて米僕が励んだのは有職故実の研究であつた。京都で活動していた頃、北野天満宮の宮司であつた田中尚房が中心となり、富

岡鉄斎、幸野模領、平野神社宮司の水莖盤樟などが集まつて有職故実の研究会を発足させた。米僕もその一員として有職故実を学んだという^④。米僕の画業について、竹内栖鳳は以下のように語つている。

米僕先生の京都画壇——美術界への遺産は、何よりも其有職故実に就いての具さな研究を遂げ、有職故実の知識を、斯界に普及しやうとして誠意を盡された事である。其頃の日本画家には歴史画を画く場合、神宮皇后の御衣裳に平氣で紺縫の鎧を被せて、些の撞着も感じずに居ると言ふやうな無頓着な人間が尠くなかつた^⑤。

米僕は、有職故実の知識に秀でており、それを生かして歴史画を描くことのできる人物として評価されていたことが分かる。森鷗外が演劇脚本『日蓮聖人辻説法』を執筆する際には、時代考証に関して米僕が相談にあづかったという^⑥。そのような米僕にとつて、唐子は格好の画題であつただろう。狩野派や円山四条派は子供といえば唐子をよく描いた。中国人物を描くことは、中国文化をよく理解しているという証明で、絵師にとって技量や知識量の多さをアピールするものであり、また、中國人物を描いた絵画に接する機会があるという絵師としての地位の高さを示すことでもあつた。有職故実と同じく、漢学や中国文化に対する研究を存分に活かすことのできる作品が《唐子遊び図》であつたといえる。髪型、衣服、装身具への配慮もこうしたことからであろう。

五 唐子と園児

米僕にとつて、《園児遊戯図》は時世粋を反映する写生画であり、《唐子遊び図》は有職故実に忠実な歴史画と同じく、時代衣装など中国文化への造詣を發揮できる、過去の出来事を描く絵画であつた。この二つの作品は米僕の特筆すべき二つの性格をよく表したものといえる。これらは米僕にとつてどのように

位置づけられるのか。米僕は明治二十七（一八九四）年、国民新聞の派出員として日清戦争に従軍し、その状況を写生した作品『日清戦闘画報』を出版している。まさに当世の出来事をジャーナリストイックに写したものであるが、この写生画を作るに当たった心情を『米僕画談』において以下のように語っている。

曾て私が、種々古人の画を見て居る中に、飛驒守惟久の後三年の絵巻物を見ましたが、是は八幡公時代の筆ではないが、稍や当時を追憶するに足る、甲冑刀剣の類は、今も古実家の参考となるもので、大に年代を知るに足るのです、其の後平治の巻物、弘安蒙古襲来の巻物、是は肥後の人竹崎五郎が、陣中に画家を携へて行つて、戦争の状態を写さしめたもので、是が先づ写生画と云ふて宜しい、当時の惨状、蒙古の服装から兵器等までを詳かにして、当時を追憶することが出来る、是が即ち絵の用である、斯う考へ、身不肖ながら戦地に望んで、親しく戦況を視察して書こうと、朝鮮に渡航した⁽⁷⁾

「後三年の絵巻物」とは『後三年合戦絵巻』（東京国立博物館蔵）、「平治の巻物」とは『平治物語絵巻』、蒙古襲来の絵巻とは『蒙古襲来絵詞』（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）のことであろう。このように米僕は当世の事物を題にした写生画について、過去の合戦を描いた絵巻を引き合いに出して語っている。後世において、後三年絵巻のように当時を追憶できるものとして『日清戦闘画報』を描くことを決意していたのである。ここから、米僕は当世風俗を描く写生画においてはその光景がまるで眼前の出来事かのように追憶されることを目指し、そのため人物の衣装や装身具などが詳細に、正確に描かれていることが重要だと考えていたことが分かる。彼にとって時世粧は将来、有職故実のように歴史の記録に資するためのものという考えが強かつたことが指摘できる。『唐子遊び図』と『園児遊戯図』においても同様の関係が指摘できるのではないか。『園児遊戯図』では、対象が園児の遊戯という身近で流行的なことであつたとしても、人物表

現を丁寧に描き、なおかつ風俗を正確に表すことで時を経ても描かれた時のこととを鮮やかに追憶でき、有職故実のように歴史に役立てることができる。それは『唐子遊び図』のように過去の文化を今に伝える絵画と同じ役割を果たすものである。このような米僕の絵画観のもとに関係を持つのがこの二つの作品であると考えられる。そうした主張から、これらは対として描かれたといえる。『唐子遊び図』においても、子供を大きく描き、その感情を豊かに表した上で、服装などを正確に描くことであるで眼前で写生したかのように表現されている。ここには「歴史は過去の写生から作られ、現在を正確に写すことが将来の歴史となる」という米僕の考えが反映されているようである。こうして考えれば、唐子と園児という従来対になることはありえなかつた画題は並べて提示することが可能となり、「過去も現在も変わることのない、楽しげに遊ぶ子供の姿」という共通の主題を持つものとして表されるのである。同じ「戦争の惨状」を主題にした後三年絵巻と『日清戦闘画報』のように、同じ「子供が楽しく遊ぶ姿」を主題とした『唐子遊び図』と『園児遊戯図』。これらは米僕の「自分の描く絵画はいつも社会の役に立つために描くもので、常に歴史とつながっている」という意識から生まれたものである。

おわりに

本稿の内容をまとめておこう。京都市学校歴史博物館管理『唐子遊び図』と『園児遊戯図』の二作品は、久保田米僕によつて対なるものとして描かれ楊梅幼稚園に贈られたと考えられる。中国の子供を描く『唐子遊び図』は中国の歴史文化を表す格調高いものとして近世以前から狩野派や円山四条派などによって描かれてきた伝統的な画題である。一方『園児遊戯図』は明治時代、文明開化の光景であった幼稚園での唱歌遊戯という極めて先進的で当世風の画題である。通常並ぶことのないこの二つの画題を米僕はあえて対にした。そして、比較しながら鑑賞させるため、両者とも人物の表情などを豊かに描くことなどで『子供の無邪気さ』「子供が楽しげに遊ぶ姿」という共通の主題を表現している。

またそれぞれの作品における、唐子と園児の風俗表現を詳細に、正確に描くことによって、時代の違いをはつきりさせ、「時代や国が異なつても変わらない、遊ぶ子供の姿」を印象付けている。米僕はその画業において常に先進的なモチーフ、時世粧を描くことに積極的に挑戦したが、『園児遊戯図』はそれを代表する作品である。一方、『唐子遊び図』は有職故実に秀で、歴史画を得意とした米僕にとって中国文化の知識を發揮することができる格好の作品であった。一見別の制作姿勢を要す両モチーフであるが、米僕は当世の事物をジャーナリストイックに描く写生画においても、過去の歴史を描く絵画と同じ役割を果たすものとしてとらえていた。衣装などの風俗を正確に描くことで描かれた光景を追憶することができる事が重要だと述べるのである。このような考え方から、二作品は同様に歴史に資するものとして対で描かれた。さらに人物表現を豊かに描く工夫などによって同じ「遊ぶ子供」を主題としたものとして、時と場所が異なつても両者がまるで現実の光景であるように並べて鑑賞できることが主張されたのである。

- (1) 久保田米僕の略歴については、拙稿「久保田米僕『孟母断機図』（元尚徳中学校蔵）について——教育における絵画の『用』——」（『京都市学校歴史博物館研究紀要』第一号、二〇一二年）を参照されたい。
- (2) 主な先行研究では、福永知代「久保田米僕の画業に関する基礎的研究（一）『絵嶋之霞』の作品分析を中心に」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』五十五号、二〇〇二年）と同一著者「久保田米僕の画業に関する基礎的研究（二）久保田米僕と日清戦争」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』五十七号、二〇〇四年）の二つの論文が挙げられる。これらは久保田米僕の手がけた出版物を検討し、画家としての活動を丹念に追った先駆的なものである。ここでその代表作として紹介されているのは米僕が原画を描いた二つの印刷物にとどまっている。ならば、今後は現存する肉筆の作品を分析し、検討することにより美術史上での再評価を試みることが米僕研究のひとつの大きな課題となろう。
- (3) 米僕が尚徳校へ絵画を贈った経緯については、前掲拙稿に詳しい。
- (4) 久保田米斎「父久保田米僕の生涯」（『書画骨董雑誌』第七十七号、書画骨董雑誌社、一九一四年、二八頁）

参考文献

- (5) 竹内栖鳳談・豊田豊筆「思ひ出」『美の国』四巻、一九二八年
 (6) 久保田米斎、前掲書、三十頁
 (7) 石川景三編『米僕画譜』松邑三松堂、一九〇一年、二二六頁参考文献

石川景三編『米僕画譜』松邑三松堂、一九〇一年
 久保田米斎「父久保田米僕の生涯」『書画骨董雑誌』第七十七号、書画骨董雑誌社、一九一四年

神崎憲一『京都に於ける日本画史』京都精版印刷社、一九二九年
 原田平作「幕末明治 京洛の画人たち」京都新聞社、一九八五年
 福永知代「久保田米僕の画業に関する基礎的研究（一）『絵嶋之霞』の作品分析を中心に」『お茶の水女子大学人文科学紀要』五十五号、二〇〇二年

福永知代「久保田米僕の画業に関する基礎的研究（二）久保田米僕と日清戦争——『国民新聞』におけるルポルタージュを中心に」『お茶の水女子大学人文科学紀要』五十七号、二〇〇四年



【図1】久保田米僊《唐子遊び図》 元尚徳中学校蔵



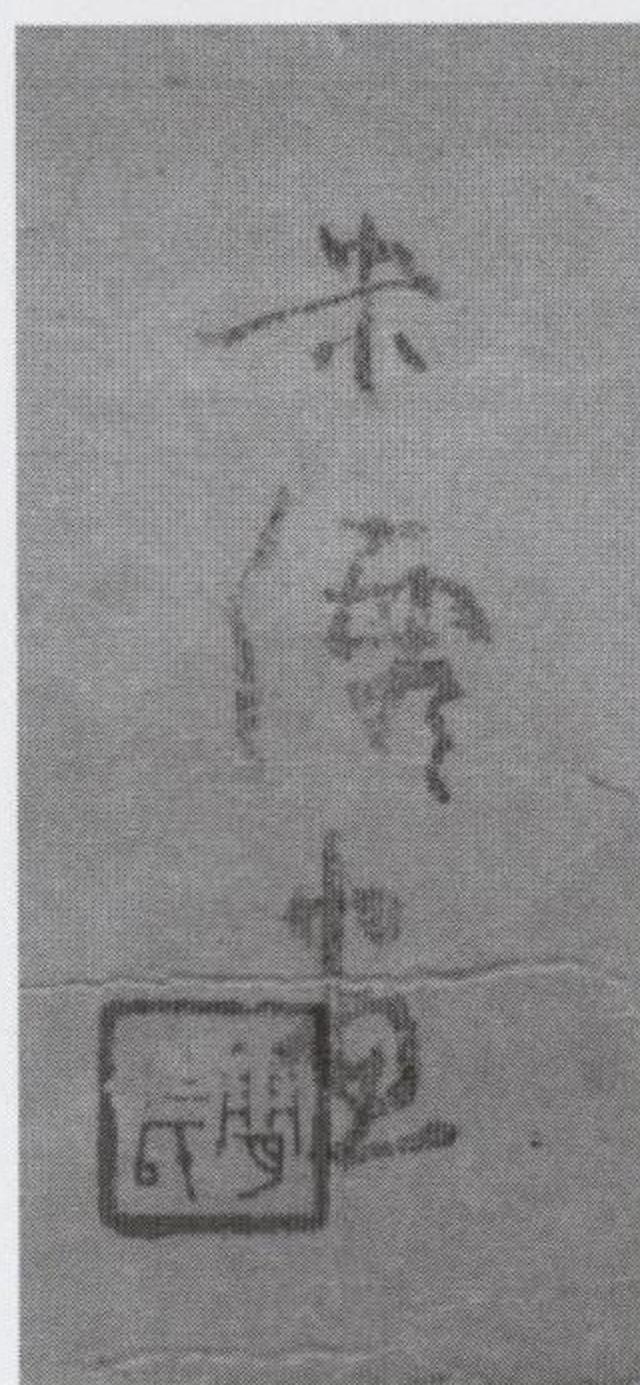
【挿図1】



【図1部分】



【図2】久保田米僊《園児遊戯図》 元尚徳中学校蔵



【挿図2】



【図2部分】

執筆者紹介(掲載順)

和崎 光太郎 当館学芸員

小中 秀則 当館博物館主事

車田 秀樹 当館博物館主事

森 光彦 当館学芸員

『京都市学校歴史博物館研究紀要』第一号の内容

平成二四(二〇一二)年六月発行

『京都市学校歴史博物館研究紀要』第一号の発行にあたって

和崎 光太郎

資料紹介 「校地変更及新校地買収交渉ニ関する書類綴
(元立誠小学校蔵)」について

小林 昌代

作品紹介 久保田米僊筆『孟母断機図』(元尚徳中学校蔵)について
—教育における絵画の「用」—

森 光彦

【挿圖】

【図1部分】

研究紀要 第二号

京都市学校歴史博物館

平成二十五（二〇一三）年六月三十日 発行

編集・発行 京都市学校歴史博物館

京都市下京区御幸町通仏光寺下る
橘町四三七番地

印刷 株式会社田中プリント